

カール・メンガー生誕百年



カール・メンガー Carl Menger の生れたのは一八四〇年二月二十三日である。(但し Hayek 教授のメンガー傳——邦譯あり、『經濟志林』第九卷第一號——では生れた日が、二十八日となつてゐる。二十三日は『國家學辭典』中の L. Eiber の文に據るものである。いま何れが眞なりやを確め得ない。) 言ふまでもなくメンガーは經濟學上所謂近代理論の創設者の一人でありオーストリア學派の開祖である。しかし我が東京商科大學はメンガーとはとりわけ因縁が深い。即ちいま大學附屬圖書館に收められてゐる「メンガー文庫」は教授の藏書を購入したものであり、それは教授が生前五十年間擔まざる努力によつて蒐集したる世に誇るべき珍重なる文庫なのである。

メンガー生誕百年にあたり吾々は改めて彼の偉大なる業績をしのぶものである。しかしそれは單に過去の記念の爲めではない。メンガーの遺した業績は社會科學研究の近代的基礎づけと

消 息

して今日も幾多の問題を含んでゐる。例へば、メンガーの「主觀主義的見方」から經濟生活に於ける實踐理性ともいふべき問題を展開してゐる人に Robert Wilbrandt や我が杉村博士がある。今日のウィーン學派のうちでは限界利用の作用についてアブリオリツシユな解釋 (Mises) とアリスティツシユな解釋 (Rosenstein-Rodan & Morgenstern) との分裂が問題にならう。更にメンガーの「精密方法」を今日のロギスティックの立場にまで進めんとしてゐる人に他ならぬ令息 Karl Menger がある(彼は "Erläuterung neuerer Fortschritte in der exakten Behandlung sozialwissenschaftlicher Probleme" と云々論文を *Neuere Fortschritte in den exakten Wissenschaften* Wien 1936 に寄せてゐる)。

しかし私はいまこれらの點をこゝで考察する餘裕をもたない。こゝでは本誌の一隅を利用してメンガーの生涯とメンガー文庫について簡単に述べようとするに過ぎない。



メンガーの生地はポーランド國の南部にある Galizien 地方の

一橋論叢 第五卷 第三號

Neu-Sandez と云ふ町である。彼は二人の弟即ち Anton (後に『勞働全收権論』の著者) 及び Max と共に、ウィーン並にプラウ大学の諸大學に於て法律學及び國家學を收めた。やがてクヲカウ大學で學位を獲得した後、一旦ジャーナリズムに身を投じ諸新聞に評論を寄稿したが、數年後オーストリアの内閣新聞局の官吏となつた。彼の覺え書によると、その頃(一八六七年秋)經濟學殊に價值價格理論に興味を感じ、廣く關係諸文獻を研究し始めたのだと云ふ。彼の第一主著『國民經濟學原理』(Grundsätze der Volkswirtschaftslehre)は一八七一年に刊行された。言ふまでもなくこれは主觀價值説の體系を打ち樹てた礎石として大きな影響を世に與へた書物である。

メンガーがウィーン大學の Privatdozent になつたのはその翌年一八七二年であるが、その頃は彼の主著はまだそんなに高く評價されず、此の時の就職も若干困難があつたと傳へられてゐる。更にその翌年 Ausserordentlicher Professor となつた。七六年には奧國皇儲ルドルフの御教育掛の一人として端西・英吉利・佛蘭西・獨逸等各地へ隨行し、七八年歸國後再びウィーン大學の Professor として經濟學の講座をもつた。この時以來メンガーは靜穩なる學究生活に這入つたのである。

その頃メンガーは理論的研究に對する一般獨逸學界の無理解

を反駁すべく方法論の研究に向つた。かくて第二の主著『社會科學方法論』(Untersuchungen über die Methode der Socialwissenschaften, und der politischen Ökonomie insbesondere)は一八八三年に出版された。これが獨逸歴史派の重鎮シュモラーとの方法論争を呼び起したことは餘りにも有名であらう。

八〇年代の末、メンガーは選ばれてオーストリア幣制調査委員會の委員になり、鋭き頭腦と豊富な知識とを以て同委員會に指導的な役目を演じた。九〇年代の始め幣制や貨幣起源に關する數篇の論文及びパンフレットが發表されたのはそのためである。『國家學辭典』(第三版)中の有名な論文『貨幣』(Geld)は遅れて一九〇九年のものである。

一九〇三年メンガーは六十三歳にしてウィーン大學を退き、爾來 Honorarprofessor として餘世を研究に専念することになつた。かくて彼は一九二一年二月廿六日八十一歳の高齡を以て夫人及び令息に護られつゝ尊き學問研究の生涯を閉じた。



メンガーの肖像畫としては E. Schmitzer と云ふ人の筆になる版畫が有名である。これは安井助教授の邦譯『原理』の口繪にもなつてゐる。商大圖書館にはその他に二つの寫眞とガラスメタがある。ハイエク教授は Schmitzer の肖像畫について

ふ——『大きな形の整つた頭、廣い前額、力強いが明確な額の皺、これらは容易に忘れ難い。背の高い、頭髮と顎鬚の濃いメンガーはその全盛期には非凡な印象を與へる風貌を持つ人であつたに相違ない。』(譯文は『經濟志林』のものに據る。)

メンガーの性格は滋味な學究的なものだつたやうである。一九〇〇年煥國上院の終身議員となつたが、こゝでは彼は殆んど活躍をせず、その政治的見解は何れかといへば保守的であつたと傳へられる。この點は弟の Anton と對蹠的である。又、メンガーが長い間『原理』の再版も翻譯も許さず、しかも自らその改訂に努力し、遂に果し得なかつたことは彼の慎重細心な態度を示すであらう。しかし彼の講義やセミナーは非常に評判がよかつた。一八九二年から三年にかけての冬學期を聽講したアメリカ人の一學生 (H. Deegan) が彼の講義に關して書きとめた感想文をハイエック教授は次のやうに引用してゐる。

『メンガー教授は五十三歳の身を輕快に振舞つてゐる。講義中引用または年月を照合するほかほとんどノートを用ゐることがない。語るに従つて着想が浮んでくるやうに思はれる。その着想が極めて簡明な言葉で表され、また極めて適當な身振で強調されるのであるから、教授に従ふのが愉快である。學生の感じでは少しも追ひたてられるといふのではなく、導かれてゐる

感じがする。結論に達したときには、何か外部から來たものやうに思はれずに自分の心の筋道の明かな結果として考へられるのである。メンガー教授の講義に出席する人々は經濟學の最終試験に少しもほかの準備を要しないとのことであるが、容易にこれは首肯できる。敘述が簡明で、その上哲學的見識を具へたかういふ才能を持つた講演者は、これまでに聞いたことがあつても、その数が少い。教授の講義はその最も鈍い學生にとつても「手に負へぬ」ことはほとんどない。しかもこの講義は最も明晰な學生にとつて常に示唆するところがあるのである。』
(譯文は『經濟志林』のものに據る。)

◇

最後に「メンガー文庫」について。

これは彼の逝去の翌年一九二二年、當時獨逸に留學してゐた孫田・大塚・金子・内藤・渡邊諸氏の並ならぬ苦心と東京側關係者の後援とによつて漸く手に入れたものである。一切本屋を仲介せしめず直接メンガー夫人との交渉によつて巧に話は纏つたのであるが、當時オーストリアは歐洲大戰後の疲弊のうちにあつて輸出入制限や爲替管理のやかましかつた時であり、文庫搬出の手續も至つて迷倒になり、一時は萬策つきて交渉を斷念した程であつたといふ。購入した翌年、メンガー文庫は未整理

のまゝ神田一ツ橋の三井ホールの二階にあつて關東大震災に遭遇した。幸ひ逸早く駆けつけた内藤(章)教授其他の盡力によつて火災を免れ、また福田教授及び學生諸君の努力で保管を全うされたのであつた。其の後、多數の整理委員諸氏の手によつて管意整理の業がすゝめられ、大正十五年に目錄出版の運びになつたのである。昭和六年の夏、令息メンガーがハーバード大學出講の歸途來朝、親しく文庫の完全に保存されてゐるのを見て我が事の如く喜んでをられたとのことである。

いまメンガー文庫は圖書館書庫の最上階に收められ、吾々は自由にその貴重なる文獻を利用し得ることとなつた。文庫中にメンガー自身の書き込みのある『原理』もある。但し表題はべ

んにて“*Allgemeine Wirtschaftstheorie*”と訂正してあるが、これは第二版の編纂者序文中或る箇處に『二冊だけ紙を挿入して綴じさせた』といふ一冊であらうか。

商大圖書館の調査によると、メンガー文庫藏書数は一五、〇三二部、一八、四八三冊である。文庫購入の際、メンガー夫人に文學書を令息に自然科學書を寄贈したとの事であるが、それは極めて僅かなものであつたやうである。商大では全體を(1)社會科學(2)民俗誌の二つに分ち、社會科學の部分については既に大正十五年『目錄』の刊行を見た。これは全藏書の約八割にあたる部分である。残りの部分の中では旅行記千三百餘冊が最も多くを占めてゐる。(昭十五年二月 山田雄三)

本號執筆者紹介

鬼頭仁三郎氏	東京商科大學専門部教授學部講師
佐原貴臣氏	高岡高等商業學校教授
常盤敏太氏	東京商科大學教授
中山伊知郎氏	東京商科大學教授
西島彌太郎氏	大阪商科大學講師
田上穰治氏	東京商科大學助教授
吉永榮助氏	東京商科大學助教授
江澤謙爾氏	東京商科大學豫科講師
山田雄三氏	東京商科大學助教授